
麻雀同好会・雀龍

わらびもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻雀同好会・雀龍

【Zコード】

Z6012C

【作者名】

わらびもち

【あらすじ】

受験期に麻雀にはまってしまい、志望校に行けず平凡な商業高校に入学することになった雨宮達樹。あまみやたつき 達樹はもう一度と麻雀をやらないと決意する。しかし、仮入部初日。麻雀同好会を見つけてしまってそのまま麻雀同好会にはいつてしまい、いろいろなことをやらされる羽目に。男子1人に女子3人。このまま誰か1人と恋に落ちるかと考えていたが、そんなこともなくただ毎日麻雀に明け暮れる日々が続くはず。そんな、主人公のちょっとパシられる麻雀活劇です。

第壹話 麻雀同好会へ

親に聞くと大抵の人はこう言つだらう。

「高校生活はとても早く感じたな」

聞いても分かるとおり、高校生活は人生の中でもとても重要ということが。

しかし、この重要な高校生活は大半が中3での生活で決まりてしまう。

無論、俺は中3の生活をものの見事に棒に振るつてやった。受験期真っ只中に麻雀にはまってしまい、志望校に受からず、仕方なく後期受験でごく平凡な商業高校に入ることにした。

まあ、こんなこともあって麻雀はもう一度とやらないと決意した。しかし、こんな決意もたやすく破つてしまふのが現実だ。

学校が始まつてから3日後。仮入部期間にある部活（同好会かな）を見つけた。しかしこの同好会にも驚いたものだ。高校にあつていののか？と思いたくなるような同好会だしな。しかし、これに惹かれるものはある。入るか否か。もう一度とやらないと誓つたものの、言葉を聽くと無性にやりたくなる。

そう、ここでの同好会の名前は『麻雀同好会・雀龍』じやんじゆう

シンプルながらも、そぞられる名前だ。

ガラガラと、ドアを開けた。ちょうど女子3人で3人打ちをしているところだった。

女子たちの視線が俺へ向けられる。それは好意を持つ視線では談

じてない。殺意をこめたものだろ？。

まずいところに入っちゃったな。上級生か？いや違う。同級生だ。ん？またよ。同好会なんて作れたつける？ましてや一年がだぞ。もう一度女子たちを見てみる。あれ、どうかで見たような見てないような……。1人は知つていそうで残りの2人は知らないような……。ああもう、思い出せない。

「あら、あんたうちのクラスの奴じゃない？」

知つてそう人が話しかけてきた。 そうだ。知つてるも何も隣

じやないか。女子がクラスの3分の2以上を占めている中、幸か不幸か数少ない男子と隣の奴。それがこいつか。名前は……。うーん、何つたつけ？うーん。

「あんた、隣のくせにあたしの名前覚えてないって言ひつの？頭どうかしてない？」

あいにく様だ。まだ俺の頭は正常だぞ。それよりこっちは必死で思い出してるんだぞ。少しは感謝しきつーんだよ。ああくそ、うーん。ああ、思い出した。

「橘菖蒲たちばなあやめだろ、お前」

「で、何の用？」

出来るだけ早く片付けたい様だな。若干俺を無視して再開してるし。

「あのお、ひとついいかな？」

「だから何？」

半ば怒ったように言つ。隣の席で見た感じでは、ただの美人にしか見えないのだが、本性はものすごく腹黒い。人は見かけによらずとはこのことか。

「あのさ、打つてもいい？」

さつき俺がここに入ってきたときと同じ視線が返された。同じく、殺意をこめた視線。

タブーか？ まずいことを言ってしまった様な気がしてしまった。帰りたいけどれない。ヤンキーに囲まれた気分だろう。実際ヤンキーに囲まれたこと無いからあくまでも想像だが。

「なにつつ立つてんの？ 早く座りなさいよ。打つんでしょ？」

意外な反応に戸惑いつつもひとつ空いているいすに座る。東席、親か。

初めて自らの手で、マージャンが打てる喜びをかみしめながら、女子3人を見てみることにした。

対面クラスメイトで隣の席にいる橘菖蒲。クラスで隣にいる以上は美人にしか見えない。ロングヘアで髪留めはしていない。好みのタイプだ。たとえるなら、4・5年前の宇多田ヒカルかな。しかし、恋人にするにはやな趣味を持つているものだ。案外腹黒い面を持つているようだし。

上家にいるのは知らない美少女。美女というには若干幼いように見えるが、実は同学年だつたりしたりもある。セミロングで若干カールしている。ロリコン好きにはたまらないだろう。顔、身長から見て不釣合いなほど胸がある。悪くないかな。

下家にいるのも知らない美女。こつちは2人から見るとかなり大人びている。ショートカットでいかにも厳格そうな人かな。意外とツンデレキャラだつたりもしそうか。胸も結構ある。これで性格もよかつたらパーフェクト。

配牌しながら、

「お一方のお名前は？」

「ちよ、あんた。何であたし以外には丁寧語なのよ！」

「いいじゃん、いいじゃん。私はね、三上癒月だよ、よろしくう

見た感じそのままのような声だな。天使のような人だ。名前から

して癒してくれそう。しかーし、この人も同級生。考えられないくらいかわいい。少女として。

「伊達美雪だ。今後ともよろしく。とにかくアナタは？」

「ああ、俺は雨宮達樹」

伊達さんも見た感じそのままだな。名前も声も。

美人に囲まれて麻雀をやるのもおつな物だな。今後ともよろしくか。これはもしや、永久お友達宣言か？それは残念だぞ。どっちかでもいいから今後お友達以上の関係になつてみたいものだ。ん？今後・・・・・ちょっと待てよ。それつてもしかすると、この先もここに来いよつてことか？

「あら、ただで打つてのにもう来ないつもり？そう、もちろん負けたら何でも言つ書きくのよ」

くそ、いちいちうざつた女だな、橘菖蒲は。そんなんだつたら一生彼氏できないぞ。

「あら失礼ね。告られたことぐらい何回だつてあるわよ」

「そう、菖蒲っちはただ付き合わないだけだよ。気を付けたほうがよいぞおー」

「もう癒用い。言わないでよ」

「さて、何でも言つこと聞くなら結構迷うな」

くそ、やはりこの方。冷静に消えかけていた事をついてくる。強敵だぞ。

「金がらみ以外ならなんだつてやつてやるよ

「おお、言つたな達くん。それじゃあ・・・・・・好きな人を激白つてのはどう？」

どうもこいつもない。金意外なら何でもいいとは言つたが、きついぞそれは。

「なら私は・・・・・・次負けたら何でも言つことをきへつてので」

どういふことだ？別にそれならいいけど。

つか待てよ。何で俺が負けるつて設定になつてんだよ。

「だつて麻雀歴いくつだよ」

麻雀歴、麻雀歴・・・・・。れつと一ヶ月くらいだらり。受験の時にはもう親に止められていたしな。しかも、やつとオンライン麻雀でF級取得したばつかで、俗に言う初心者?たぶんこいつら手馴れているだろうし・・・・・・勝てるか、ほんとこ。

「菖蒲はどうするんだ。馬の骨の罰を」

う、馬の骨?見かけによるがやはりこの方も黒いな。

「うーん、そうね。じゃあ週末にみんなにおひるひてのは?」

おい、ちょっと待て。金がらみだぞ。

「それいいね。よろしく頼んだよ、達くん

いや、よろしく頼んだよじやないよ。

「そうだな。私はスタバでいいぞ」

でいいぞか、おまえ。少しは人の話し聞けって。

「じゃ、それで決まりね。ほら始めよ。あんたからでしょうはあ。ため息しか出ない。勝つ気もしないし、負けるたら最悪だし。来るんじやなかつたよ。

はあ、しようがない。やつてやるか。

ドリは壱萬イチマンだから、二萬ニヤンか。手牌もそこまで悪くはない。

さて、何を捨てようかな。

第壱話 麻雀同好会へ（後書き）

本小説に興味をもつて呼んでくれた方、ありがとうございます。自分自身も主人公と同じく、麻雀初心者なので間違っていることがあるとは思います。そのときは教えてもらえた幸いです。自分もこの小説を書いていつて麻雀スキルをアップさせようと思っています。

なお、本小説はあまり役に立たないと想いますので、ご了承を。また、次話でお会いできたら光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6012c/>

麻雀同好会・雀龍

2010年10月8日22時00分発行